

令和 3 年 5 月 31 日現在

機関番号：34404

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K03118

研究課題名(和文) 日本近世の貨幣統合と経済思想

研究課題名(英文) Money unification of money and economic thought in the early modern Japan

研究代表者

高木 久史 (Takagi, Hisashi)

大阪経済大学・経済学部・教授

研究者番号：50510252

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：近世日本的な貨幣統合の経緯を示す史実を、16・17世紀の現象的連続性に注目しつつに検出するとともに、その背後にある、16・17世紀固有の論理・思想を史料の実証に基づき復元した。思想面については、近代的貨幣統合の文脈とは異なる、当該時期固有の思想的背景を明らかにすることを目的とした。従来の貨幣史研究と経済思想史研究とがそれぞれ独立して論じられてきたのに対し、本研究は、貨幣に関する史実と政策思想を含む当時の思想動向とを関連づけて分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

貨幣統合のありようにつき、日本近世の歴史的経験を提示することで、近代的なそれを相対化するところに学術的意義・社会的意義がある。また近世日本の貨幣思想につき、従来の研究が表層的な近代的接近を語ってきたのに対し、本研究ではその論理の時代的固有性を重視して分析したところに学術的意義・社会的意義がある。これらの作業を通じて、たとえば、歴史上の貨幣素材の選択経緯につき、従来型の論理を相対化することを試みた。

研究成果の概要(英文)：This research explores monetary integration at the beginning of early-modern Japan, with a particular focus on the late 16th and early 17th centuries. Previous research has described the development process of monetary system in the Tokugawa period separately from the experiences in the preceding century, however, this research emphasizes the fact that the monetary system in the Tokugawa period inherited a system in the 16th century that was autonomously developed in this society. In addition, this research focuses on the ideal aspect of currency system in the early-modern Japan to reveal the background of the process of the monetary integration.

研究分野：日本経済史

キーワード：日本近世 貨幣 思想

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

#### (1) 全体的背景

従来の研究は歴史上の貨幣統合を近代的な文脈、たとえば「統一市場における取引の合理化」といった言説で、予定調和的に、かつ必然として語る傾向があった。しかしそのような通説的理解は先に示した現在の問題の点からも再考が必要である。研究代表者は、現代の貨幣を歴史の中で相対化するという視点に基づき、以前の叙述で、歴史上の数々の貨幣統合の論理は同じではなく時代ごとの固有性がある、という展望を示した。

また、貨幣統合という近代のありかたをもって標準とすることが一般的である。しかしながら、近代的定義とは異なるそのありようを歴史的経験の中に探索することは、現代のありようを相対化するにあたり有益だろう。これら問題意識が研究開始当初の全体的背景としてある。

#### (2) 日本の16・17世紀に注目する理由

歴史的経験から貨幣統合に関する有益な知見を得るとして、その分析対象として注目すべきが、日本の16・17世紀、すなわち三貨制度(金貨・銀貨・銭の併用)として表現される近世的貨幣統合の時期である。近世的貨幣統合の背景には日本がヨーロッパ中心のグローバル経済への編入、具体的現象としては日本からの銀輸出の開始があった。つまりグローバル化という、現代の日本社会も直面している現象の始期が当該時期だった。16・17世紀グローバル化の日本社会とくに貨幣面への影響を明らかにし、まさに経済のグローバル化の中にある現代日本の状況と比較することで、将来の通貨像を考えるための展望を得られるのではないか、という問題意識が、この時期に注目する理由である。

#### (3) 思想面への視野

貨幣統合の経緯を分析するに際し留意すべきが、その論理・思想的背景が現代と必ずしも同じではない可能性がある、という点である。つまり実態面の復元と並行して、時代固有の論理・思想も含めて復元することで、統合経緯の歴史像を総合的に示すことができ、その結果、近代的な統合論理の相対化をはかることができるのではないか、という問題意識が、思想面に注目する理由である。

#### (4) 研究開始当初の研究状況

以上示した問題意識ならびに論点に関し、研究開始当初の研究状況には大きく三つの問題があった。

##### 貨幣統合の方向性への視点の弱さ

従来の研究は貨幣秩序の地域性・分節性の復元に傾斜する傾向にある。これはこれで重要だが、結果的に統合するという史実と議論の接合が十分になされていない。

##### 16・17世紀の間を連続的に分析する研究の少なさ

従来の研究は伝統的な時代区分に拘泥し、中世・近世を包括的に語ることを避ける傾向がある。実際、信長と家康の間の貨幣政策、つまり三貨制度成立過程の復元研究は、長く空白だった。

##### 統合の背景にある論理・思想状況との関係に関する分析の不在

従来の研究は貨幣統合にいたる経緯自体は語るが、為政者がそのような政策を実施し、社会がそれを受容する背景にある論理、政策思想・社会思想についてはまったく分析がない。この問題について18世紀以降の貨幣思想と政策との関係については若干ながら分析がある(例えば新井白石のもの)ことと対照的である。

以上のような研究状況に対し研究代表者は、については、これまでに受けた研究費などにより、16・17世紀日本の各地域(畿内周辺・中国・四国・九州地方など)の貨幣使用秩序の復元作業を進め、政策とは直接関係ない、社会の実態レベルでの統合の方向性について示す史料を複数検出した。

については、それを埋める作業を行った。例えば三貨のうち金貨・銀貨の統合経緯につき、信長の三貨比価公定法と家康による慶長金銀発行との間の史実は従来ほぼ検出されていなかったが、研究代表者は社会の実態レベルでの各地の金貨・銀貨統合を示す史実を複数検出した。銭については、家康が基準銭に採用したビタ(最低品質銭以外一般)を、すでに信長が基準銭に採用しており、秀吉もその政策を継承していたことを明らかにした。これにより、銭の統一政策は家康以降に初めて行われたとしてきた従来のイメージを大きく変えた。

については、日本貨幣史の通史叙述の中で18世紀以降の貨幣思想について若干言及した。これを16・17世紀のそれとどう接合して分析するか、という問題展望を示した

以上の研究状況のもと、本研究課題に着手した。

## 2. 研究の目的

先に示したように、研究代表者は近世日本的な貨幣統合の実態面を示す史実をこれまで複数検出してきた。この蓄積を踏まえ、近世日本的な貨幣統合の経緯を示す史実をさらに検出するとともに、その背後にある、16・17世紀固有の論理・思想を史料学的実証に基づき復元することを目的として設定した。

思想面については、近代的貨幣統合の文脈とは異なる、当該時期固有の思想的背景を明らかにすることを目的とした。参考になるのが安国良一氏の業績である。安国氏は18世紀の新井白石の貨幣良質化政策を対外的威信の維持という政治思想から説明する。こういった、必ずしも経済合理性に還元されない、個別政策の思想的背景も含めて分析する。たとえば、なぜ江戸幕府は金・銀という素材を選んだのか、たとえば金・銀は永続するという認識との関係や、なぜ幕末まで紙を貨幣素材に使わなかったのか、たとえば庶民の紙幣に対する蔑視との関係など、これら当時の人々の貨幣に対する認識が三貨制度形成とどう関係したのか、等の問題につき検討する。これにより、統合にいたる史実を単に羅列するのではなく、その思想的背景を含めた、より豊かな歴史像を示すことを目的として設定した。

## 3. 研究の方法

### (1) 概要

以下の二つの軸により構成する。

近世的貨幣統合経緯に関する実態面、三貨制度成立過程に関連する史実の復元

近世的貨幣統合経緯に関する実態と当時における貨幣に関する思想との関係の検証

具体的方法論としては、文献史学では当然であるが、史料調査・検索を中心に行った。

なお、本研究では、国外への積極的かつ継続的な情報発信をはかることで、国際比較・世界史的位置づけも含むより豊かな研究成果の獲得をはかることを目指した。これら作業を通じ、近世日本の貨幣システムにつき比較史的観点から新たな知見を得て、現代的貨幣システムを相対化する視野を提供することを目指した。

### (2) 具体的戦略

については、事例研究に重点を置いた。具体的には、各地の社会の実態レベルにおける三貨制度の定着の経緯を復元することを試みた。

対象時期は織田信長政権期(16世紀後半)から徳川綱吉政権期(17世紀末)までに設定した。

については、当時の体系的思想叙述に限らず、法制史料(政策関連記録や意見書なども含む)・商人往来物・文学作品などで、従来の貨幣史研究で活用されてこなかった史料を検索し、それらに見られる貨幣に対する人々の認識を検出した。

その際、当時の思想の中に近代的なそれと同質のものを検出して「近代の萌芽」と評価して思考停止するのではなく、むしろ表面的には同じでもその背後にある論理の異質性、すなわち近世貨幣思想の固有性を検出することを目指した。これにより近代貨幣思想の相対化することを目指した。

## 4. 研究成果

### (1) 概要

16・17世紀を境として中世史・近世史が断絶的に分析されることが従来多い当該問題につき、本研究ではこの双方を連続的に論じた。また、従来の貨幣史研究と経済思想史研究とがそれぞれ独立して論じられてきたのに対し、本研究は、貨幣に関する史実と政策思想を含む当時の思想動向とを関連づけて分析した。

加えて、貨幣統合につき近代のそれと異なる論理を検出し、現代貨幣システムとは異なる貨幣秩序・貨幣思想を提示することで、現代貨幣システムを相対化し、未来の通貨システムを構想する上での有益な知見を得た。

### (2) 具体的達成

日本近世の貨幣システムの成立経緯については、16世紀までの歴史的経験を17世紀の日本社会はどう継承したか、という観点から、交換手段として機能したもののありようを復元した。その結果復元することができた像は以下の通りである。

16世紀後半に顕在化した銭不足と鉱山開発ラッシュによる金・銀供給の増が大きく影響した。私的セクタは、以前から使ってきた銭・米に加え、金貨・銀貨を創出し、自律的に標準化させた。金属通貨以外にも、以前から存在した手形類・掛取引の使用を続けた。

20世紀半ばの言説は、日明政府間貿易があたかも唯一の銭供給チャネルであったかのように語っていた。しかし現在は、国産模造銭や信用手段の活用を積極的に評価すべき研究段階にある。

社会慣行、言い換えれば自生的秩序を16世紀の政府は追認する。また、17世紀以降の三貨制度は、16世紀に私的セクタが独自に発行した銭・金貨・銀貨を統一政権が追認したものの延長線上にあった。

価値尺度の面では、16世紀より前は銭建て(文単位)が主な基準だったが、16世紀後半に金

貨建て(両系単位)・銀貨建て(匁系単位)表記が加わり、17世紀に続く。モノユニットの中世からマルチユニットの近世への変化、すなわち単位体系の分散化である。その一方で、それぞれの媒体の標準化(質量・品位、米であれば体積)と、地域差(基準銭定義、衡制、品位定義など)が解消したという限りでの貨幣統合を達成した。

手形類についても、書式的には預状など中世手形類の延長線上にある私札が17世紀初頭に登場し、その機能を継承する形で藩札が登場する。このように、社会慣行の政策的採用という道程により、近世日本の貨幣制度は成立した。

「三貨制度」の語は、近世日本において、三種類の金属通貨だけを使ってきたかのような錯視を私たちに与える。しかしながら、それら金属通貨を見合いに発行される私札・藩札など非金属素材のものや、掛取引など形而下の媒体を必ずしも付随しないものも存在し、それが取引額のうちの少なくない比率を占めたことを私たちは再認識するべきである。そしてその系譜は16世紀以前の歴史的経験にさかのぼる。

顧みるに、前近代日本社会が金・銀を商品貨幣の文脈で使った、いいかえれば日本国内での金貨・銀貨の通用価値が市場価格・国際価格を反映したのは、16世紀における金地金・銀地金の秤量貨幣としての使用の普及から、17世紀後半ないし末における領国貨幣(地方政府すなわち藩が発行した金属通貨)の淘汰ならびに元禄8(1695)年における元禄金銀の発行すなわち江戸幕府が発行した金貨・銀貨規格の貶質改定(個体質量は維持したうえで品位を下げる)までだった。

18世紀以後の展開については、江戸幕府が宝永7(1710)年に発行した宝永小判は、額面は1両だが、個体質量は1両未満だった。結果、質量単位から乖離した純粋な、ともいべき通貨単位としての両系単位が成立する。江戸幕府は一八世紀後半に明和二朱銀など両系単位の銀貨を供給し始める。これに並行して匁系単位銀貨の現物が市場から退場したことに伴い、実質的金本位制度への移行すなわち両系単位通貨への統合が進む。その延長線上に、1両=1円という通貨単位変更による、円単位での通貨統合を展望できる。

18世紀における両系単位通貨への収斂傾向と事実上の金本位制への接近すなわち単位体系の相対的単純化、幕府発行金属通貨の貶質改定による正味質量と額面との乖離すなわち質量単位と通貨単位の乖離(名目貨幣化)、匁系単位銀貨の市場からの退場、鉄銭・黄銅銭の登場すなわち銭素材の複数化などは、17世紀との断絶面を表現する。

以上の現象の背後にある思想状況については、太宰春台『経済録』を主たる対象として、他の主体による著述と比較することで、太宰の貨幣観の歴史的特徴を復元した。貨幣=国家威信観に基づく悪質金属貨批判(良貨思想)は新井白石と共通し、素材の永続性への執着に基づく悪質金属貨・紙幣批判は、17世紀以来19世紀にも続く政治思想の系譜の一端をなす。ただ、彼独自の自然観に基づく金属非枯渴観は、管見の限りほかに類がなく(少なくとも新井と対照的である)、同時代における特殊性、すなわち太宰の思想の固有性をみてとれる。

こういった、太宰の経済思想の歴史性・固有性を、従来の研究はあまり言及してこなかった。彼の言説に近代的な要素を発見し、近代への接近を語って思考停止する、またはその逆に近代的言説に到達できなかったことをもって思考停止する、という旧来型の近代化論的な研究態度は反省するべきである。また、太宰がそうした結論を下すに至った経緯の歴史性にもまた注目するべきである。今後の展望としては、太宰以外の紙幣否定論・紙幣肯定論との比較が必要である。たとえば、肯定論者がどのような論理で肯定しているのか、その歴史性を明らかにすることが必要である。

#### <引用文献>

安国 良一、日本近世貨幣史の研究、思文閣出版、2016、全312

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 高木久史	4. 巻 988
2. 論文標題 中近世移行期日本における貨幣流通の実態をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 11-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木久史	4. 巻 50
2. 論文標題 Means of Exchange in Small Transactions in 16th Century Japan: lower class bronze coin, silver currency, and credit use	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国語国文論集	6. 最初と最後の頁 39-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高木久史	4. 巻 15
2. 論文標題 Reintegration of Bronze Coins during the Late 16th and the Early 17th Century Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 海港都市研究	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 高木久史	4. 巻 46
2. 論文標題 Recent Studies of Bronze Coin Integration at the Beginning of Early-modern Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 安田女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 11-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 Means of Exchange in Small Transactions in 16th Century Japan: lower class bronze coin, silver currency, and credit use
3. 学会等名 workshop La monnaie des pauvres (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 (合評) 岩橋勝『近世貨幣と経済発展』
3. 学会等名 貨幣史研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 中近世移行期日本における貨幣流通の実態をめぐって：北海道からの視点を含む
3. 学会等名 北大史学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 紙幣を中心にみる近世日本貨幣制度像の再構築
3. 学会等名 社会経済史学会全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 Reintegration of bronze coins during the late 16th and the early 17th century Japans
3. 学会等名 18th World Economic History Congress ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 16世紀日本における貨幣の発行と流通
3. 学会等名 日本金融学会大会 ( 国際学会 )
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 太宰春台の貨幣論における素材観
3. 学会等名 貨幣史研究会例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 Reintegration of bronze coins during the late 16th and the early 17th century Japan: especially focused on the transactions between Japan and China
3. 学会等名 The 9th World Committee of Maritime Culture Institutes International Conference ( 国際学会 )
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 近世初頭の錢統合をめぐる議論の現状
3. 学会等名 近世史フォーラム例会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 『近世の開幕と貨幣統合』執筆を通じて紙幣 私札について考えたこと
3. 学会等名 日本における紙幣の発生と展開2017年度第1回研究集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 高木久史
2. 発表標題 紙幣を中心にみる近世日本貨幣制度像の再構築
3. 学会等名 日本における紙幣の発生と展開2017年度第2回研究集会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 高木 久史	4. 発行年 2018年
2. 出版社 平凡社	5. 総ページ数 224
3. 書名 撰錢とビター文の戦国史	

1. 著者名 都市史学会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 688
3. 書名 日本都市史・建築史事典	

1. 著者名 高木 久史	4. 発行年 2017年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 304
3. 書名 近世の開幕と貨幣統合	

1. 著者名 鎮目雅人、高木久史、加藤慶一郎、岩橋勝、安国良一、高槻泰郎、つる見誠良、諸田博昭、西村雄志、高屋定美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 472
3. 書名 信用貨幣の生成と展開	

1. 著者名 岩橋勝、西村雄志、井上正夫、稲吉昭彦、川戸貴史、千枝大志、鹿野嘉昭、高木久史、古賀康士、安国良一、藤井典子、加藤慶一郎、鎮目雅人、安木新一郎、名城邦夫、櫻木晋一	4. 発行年 2021年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 376
3. 書名 貨幣の統合と多様性のダイナミズム	

〔産業財産権〕

〔その他〕

安田女子大学公式ウェブサイト  
[http://www.yasuda-u.ac.jp/course/bungaku/news/page/post\\_173.html](http://www.yasuda-u.ac.jp/course/bungaku/news/page/post_173.html)  
安田女子大学公式ウェブサイト  
[http://www.yasuda-u.ac.jp/course/bungaku/news/page/post\\_140.html](http://www.yasuda-u.ac.jp/course/bungaku/news/page/post_140.html)  
学科ニュース / 日本文学科 / 安田女子大学  
<http://www.yasuda-u.ac.jp/course/bungaku/news/index.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------